公認会計士稲門会

「会長挨拶」

近野　博
（昭和45年3月商学部卒業）

公認会計士稲門会会員の皆様こんにちは。勝島敏明前会長の後任として会長に選任されてから早くも1年半以上が経過しました。会員の皆様には、日頃より会務についてご理解、ご協力を賜り誠に有難うございます。

この1年間の公認会計士稲門会の活動を振り返ります。

1. 定期総会の開催

平成25年7月1日（月）、大隈会館201～202号室において定期総会、懇親会が開催されました。懇親会には例年通り、大学関係、会計学関係の教員、他大学の会計士団体の代表、衆議院議員等多数のご参加を頂き盛大に行われました。それに先立つ総会では、会務報告、会計報告、事業計画等が原案通り可決承認されました。

2. 役員会の開催

平成25年6月6日（木）、12月5日（木）夕方6時30分より事務局である新創監査法人の会議室において役員会を開催しました。永年にわたり会報担当副会長としてお世話になった古谷伸太郎会員が監査法人を退職して、日本を離れることになり、その後任として松下副会長と若手幹事の皆様にお願いしております。古谷さん長い間本当に有難うございました。

3. 懇親会の開催

総会終了後の懇親会では、若手会計士を含む約70名が参加し、大いに盛り上がりました。二次会はいつもの東寿司で約30名。

役員会の後には、それぞれ懇親会、忘年会を開催しております。

ゴルフコンペも例年同様盛大に行われています。

9月7日（土）に軽井沢72、西コースで早慶戦。10月5日（土）には同じく軽井沢72で十月会（大学対抗ゴルフ）。そして11月10日（日）には大学の先生を交えてCPAゴルフ稲門会（　兼大塚宗春先生、佐藤紘光先生古希記念ゴルフ）を取手国際GCで開催しました。

今年は早慶戦に勝利し、十月会は団体優勝、団体ベスグロの完全優勝でした。

4. 奨学金

公認会計士稲門会では、毎年4名のアジアからの留学生に対して奨学金を贈呈しております。会員の大野高正先生と田中祐輔先生が中心となって、広く会員から寄付を募り、これを原資として毎年4名の留学生に各50万円を支給してきたもので、今は小西彦衛会員に引き継がれ、20年を超えて

寄付金の累計は5000万円を超えました。皆様の篤い志に感謝します。

5. 大学関係

平成25年6月26日（水）11号館において、日本公認会計士協会の広報活動の一環として公認会計士制度説明会に近野が参加。公認会計士稲門会の活動をPRしました。

平成25年12月20日（金）大隈ガーデンハウス

にて、総長招待寄付者と奨学生の集いに近野と松下八寿彦副会長が参加、奨学生と交流しました。会計関係の奨学金は、公認会計士稲門会以外に、青木先生、染谷先生、新井先生、小川先生、そして会員の大野高正先生の奨学金があります。

大学を退職後、平成25年4月より公認会計士監査・審査会の会長に就任された千代田邦夫先生の最終講義が1月25日（土）に11号館で行われました。千代田先生らしい熱血講義でした。

3月25日（火）には、大学院会計研究科の学位授与式に、公認会計士監査・審査会会長の千代田先生とともに来賓として招かれ近野が出席しました。式では千代田先生の祝辞の後に、私が学生の皆様に祝辞を述べ、公認会計士稲門会の活動のPRと入会の勧誘をしました。

商学部の「税務会計」講座の講師として、会員の袖山さんと奥秋さんが1年間勤められました。

26年度は引き続きの奥秋会員と新たに松下会員の2名が担当されます。

11月13日（水）には、早稲田大学校友会ゴルフコンペに初めて参加しました。（藤田、小川、有賀、近野）埼玉県の久邇カントリー倶楽部で200名以上参加の大コンペ。当会のチームは団体5位に入賞しました。ちなみにベスグロは野球部から読売巨人軍に入った仁村薫選手でした。

6. 叙勲

大学の会計学関係の先生の叙勲が続きました。

平成25年の春の叙勲で大塚宗春先生が、瑞宝大綬章を受章されました。7月13日（土）にリーガロイヤルホテルで祝賀会が開催され、当会の会員が多数出席しております。

平成25年の秋の叙勲では、石塚博司先生が瑞宝中綬章を受章されました。12月15日（日）に

大隈庭園内の完之荘にて祝賀食事会が行われ、当会から遠藤四男夫会員と近野が出席しました。

7. 公認会計士試験合格祝賀会

3月24日（月）にはリーガロイヤルホテル東京で合格祝賀会が行われ、約60名の合格者と

会員、大学関係、教員等多数のご参加により合格の後輩を祝いました。合格者の皆様の多くが公認会計士稲門会に入会されますようお待ちしております。

8. 他大学との交流

他大学の会計人会との交流も、例年同様行われており、総会の後の懇親会に相互に招待し合っております。今年は、慶應、青山学院、日大、明治、専修、税理士稲門会などに会長、副会長が分担して参加しております。中でも専修大学は会計人会が出来て平成25年に50周年となり盛大な記念式典が開催されました。

9. その他

3月には、公認会計士協会東京会主催の第1回東京音楽祭があり、当会からは安村長生会員と渡辺俊之会員が出場されました。会場は大盛況で、会計士でこんな才能の持ち主がいたのかと驚きました。

4月には、有志で護国寺の大隈重信候の墓参りに行ってきました。

公認会計士稲門会の次の総会は、7月1日（火）に大隈会館、201、202号室で開催されます。

多数の会員の皆様のご参加をお待ちしております。

（平成26年4月　記）

平成26年度定時総会のお知らせ

平成26年度定期総会は、下記の通り開催の予定です。会員はもとより早稲田大学で教鞭をとっておられる先生方、他大学よりの来賓の方々も多数出席され懇親のよい機会です。是非多数の会員に参加をお願い致します。

日　時　　平成26年7月1日(火)　午後6時30分より
場　所　　大隈会館　201・202号室

平成25年度奨学事業報告
－早稲田大学とアジア－

奨学事業委員会委員長
小西　彦衛
（昭和44年商学部卒業）

会員の皆様には公認会計士稲門会奨学事業にご理解をいただき、奨学資金をお寄せくださいますことに心から感謝申し上げます。

奨学事業の意義

早稲田に学ぶアジア地域からの留学生を支える本奨学事業は、早稲田大学が草創期から今日までアジアとの学術及び人材の交流に重きをおいていることからも、近隣諸国との相互理解のために有意義なことと確信しています。奨学生の皆さんが早稲田から巣立って、祖国と日本との交流親善に寄与することが期待されます。

本事業が会員の任意の寄付金を一つにまとめて奨学資金としていることが学内で大きく評価されています。近野博会長と松下八寿彦副会長が「2013年度　総長招待　指定寄付奨学生のつどい」に出席して、当年度奨学生並びに鎌田薫総長はじめ大学関係者と有意義に交歓しました。

当会の定期総会懇親会にはその年の奨学生を招待して、会員の皆様が奨学生と親しく懇談しています。なお、本号に掲載している奨学生の馮剛君からの寄稿文をお読みください。

持続する募金活動

多くの会員の力を結集していただいている本事業も、参加者の世代を繋いでいく必要があります。従前は相当数の会員が固定的に参加していた当会諸行事も、昨今は相当数の一定の会員がその時々に入れ替わって参加しているように見受けられます。またJICPA会員名簿には居住地住所を掲載しないことになりました。このような環境変化に対応する募金活動を行って本事業の持続を図ってまいります。引き続き会員の皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

寄付のインターネット申込み

早稲田大学のWebサイトから寄付申込みができますので是非ご利用ください。〔早稲田　寄付〕検索　で寄付トップ画面に入ります。寄付申込みフォームに必要事項をインプットする際に、「寄付の種類」は「奨学金」を選び、「指定先」は「公認会計士稲門会奨学金」を選びます。支払方法はクレジットカード決済又はインターネットバンキング決済（ペイジー）です。

1. 奨学金の支給状況

大学より次の4名を奨学生として推薦いただき、各人に50万円を支給しました。

①呉　洪在　国際教養学部　3年　韓国
②丁　　璐　商学研究科　修士1年　中国
③馮　　剛　環境・エネルギー研究科　修士1年　中国
④グエン ダン トゥイ リン　国際コミュニケーション研究科　修士1年　ベトナム

2. 奨学事業収支年度別一覧（単位：万円）

今年度をもって寄付金収入累計額が5千万円を超えました。

年　　度	H3～H20年	H21年	H22年	H23年	H24年	H25年	累　計
寄付金収入	4,179	191	169	165	148	199	5,051
(寄付者数)	(平均66名)	(72名)	(67名)	(62名)	(53名)	(56名)	(年平均66名)
奨学金支給額	3,600	200	200	200	200	200	4,600
(奨学生数)	(72名)	(4名)	(4名)	(4名)	(4名)	(4名)	(92名)
資金繰越残高	579	570	539	504	452	451	

3. 平成25年度寄付者芳名（順不同・敬称略）　平成26年3月31日現在

安村　長生　佐藤　正典　飛永　信雄　社本　公一　隆島　唯夫　勝島　敏明　西山　隆司　関根　愛子　厚海　英俊
髙井　宏司　水野　義雄　猪股　世紀　鈴木　豊　石田　清絵　山口　俊明　山田眞之助　上野　紘志　大滝　史博
小林　晟祐　尾崎　隆昌　石原　裕　近野　博　小林　正樹　福田　安孝　戸田　厚司　金田　賢二　七松　優
長峯　徳積　古谷伸太郎　黒沼　憲　藤田　世潤　杉田　純　塚田　知信　奥山　章雄　堀内　三郎　渋谷　道夫
伊勢　利一　貞國　鎭　安藤　算浩　倉橋　暁　松下八寿彦　岡野　雄次　関　正弘　鈴木　智之　古川　勉
藤好　優臣　袖山　裕行　渡辺　俊之　鴛海　量良　渡辺　国夫　山﨑　清孝　中川　隆之　小暮　和敏　四月朔日丈範
匿　名　小西　彦衛　以　上

早稲田大学の生活について

馮　剛

私は中国の山東省からやってきた。現在は早稲田大学大学院環境エネルギー研究科修士一年生に在学しております。高校三年生の時は日本に来て明徳義塾高等学校で一年間にわたって日本語を勉強した。その後、日本で大学を完成した。修士卒業後は早稲田大学で博士号を目指しており、将来は帰国し研究機関・公的機関などに入って、日本で学んだことを生かして中国の発展に貢献したい。

去年9月ごろ入学して以来、私は履修科目を一生懸命に勉強し講義の内容をしっかり理解できたうえで、様々な問題について異なる視点から分析し自分の見解を得られました。そして、自分の研究テーマ「中国における中央企業のCSRの評価と推進」に関する文献調査を進んでいます。近年、中国では急速な経済発展を遂げたが様々な負の面の問題ももたらした。大気汚染、土壌汚染、水質汚染など環境が悪化させた。そのため、持続可能な発展に向け、中国では中央企業の社会的責任を検討・研究する。中国経済の持続可能な発展な道を探求したい。CSR報告書、オフィシャルサイトなど公開した情報及びインタビュー調査に基づいて中国中央企業のCSRの現状を把握する。

去年から私は国際環境リーダープログラムを参加しました。今年一月ごろ北京大学環境科学工程学院からの先生と学生たち一緒に環境省、東京都庁、日産自動車、など多数の環境機関を見学し、チームワークを通してディスカッションして社会経済発展の視点から中国北京における自動車と大気汚染の関係について調査・発表を行った。4月から文部科学省「実践型研究リーダー養成事業」の早稲田大学実施プログラム「社会問題解決リーダー育成のための文理相乗連携プログラム」を参加している。自身を成長させるためには、留学しているうちに豊富な成果を達成したいと考えている。

外国人留学生として日本で生活・留学することは大変だと思いますが、周りの先生の方々、友人たちのお陰様で、順調に進んでおります。人間の成長はただ一人だけのことではないと思っており、両親をはじめ、先生、友人などたくさんの方々と緊密な関係があるだろうか。

今回は貴会より奨学金を受給いただき、心より、感謝の気持ちを申し上げます。寄付者の方々にも深くお礼を申し上げます。このような貴重なご支援をいただき、日本での生活に大変助かりました。アルバイトの時間を減らして勉強・研究に集中することができました。両親の経済的負担も減らせます。

日本社会からご支援・援助の恩情を忘れずに、一日も早く自分の力で社会に返還したい。また、このような支援・援助の精神を継続し、より多くの援助が必要な人々に力になりたいと思っている。

瑞宝大綬章を受章して

大塚　宗春
（早稲田大学名誉教授、早稲田大学常任理事）
昭和40年第一商学部、昭和42年商学研究科修士課程卒業

平成25年春の叙勲に際し、瑞宝大綬章受章の栄誉に浴しましたことは身に余る光栄と感激いたしております。功労概要（授章理由）は「多年にわたり会計検査院長等として会計検査行政の推進に尽力した。また、大学教授として教育に尽力するとともに、会計学の研究に優れた業績を挙げ、学術の発展に貢献した」ということです。平成16年の叙勲制度の改正後、早稲田大学の教職員経験者で瑞宝大綬章を受章したのは、小山宙丸、西原春夫元総長に次いで三人目ということになります。大変光栄に思います。しかし功労概要にもある通り、私の場合には教育に尽力したという理由もあるが、会計検査院長等として会計検査行政の推進に尽力したという理由が第一に挙げられているのが、お二人の元総長とは異なるところです。4月29日に叙勲受章者が新聞紙上で発表されて以来、多くの方々からお祝いの電報、メール、品物等をいただき、心から感謝いたしております。

受章の一年ぐらい前から、会計検査院人事課を通じて、叙勲された場合に受けるかどうか、政府審議会等の公的機関に嘱任された期間等の履歴を提出してほしいといわれていましたが、早くて秋の叙勲かなと内心思っていましたので、2月に70歳を迎えた早々に受章するということは想定外のことでありました。

親授式は5月9日に皇居で執り行われた。快晴の初夏を思わせる日であった。朝前泊したホテルで燕尾服に着替え、家内とともに検査院の迎えの車で皇居に向かった。皇居正門から入り南車寄せで降りると報道関係者のカメラのフラッシュを浴び、そのなかを宮殿に進む。控室に案内され、そこには今回の旭日大綬章と瑞宝大綬章受章者の多くが配偶者とともにすでにおられた。宮内庁の関係者から、式の手順等について説明があり、式典に先立って宮内庁の方により模範が示された。

配偶者は親授式の間、控室で待つことになる。松の間で行われる親授式では、天皇陛下から勲章を賜わり、ついで安倍内閣総理大臣から勲記を授与された。その後控室に戻り、授与された勲章を身につけ、受章者と配偶者が全員そろって、松の間で天皇陛下に拝謁する。ここで陛下からお言葉を賜わり、受章者代表が挨拶をする。その後、庭にて記念写真を撮る。新聞等によく出ているのはここで撮られた写真である。

私の受章を聞きつけて、ゼミの卒業生からお祝いの会を開きたいという話をいただいた。そこでゼミの卒業生を中心に私が特にお世話になった人を加えて受章の祝賀会を、7月13日（土曜日）にリーガロイヤルホテルで開いた。稲門公認会計士会からは会長の近野先生にご祝辞を賜わった。よくあるような堅苦しい会ではなく、お見えになった方々が楽しかったと言えるような会にと助手の若林さんや大学院生の根本さんがいろいろな企画を練ってくれた。早稲田チンドン屋研究会のチンドン屋さんが会に現れた時には、来賓の方はさぞかし驚かれたことと思うが、後から聞いてみると皆さん大変喜んでおられて、印象に残る会となったと思う。

叙勲の内示があってから一番気をつけたことは、不祥事(例えば交通事故)を起こさないことと健康だ。親授式や祝賀会に発熱して欠席するようなことがあっては皆さんに申し訳ないと思い、好きなお酒も控えて過ごした。

思い起こすと還暦を前にして大学教員から今まで経験したことのない役人の世界(会計検査院)に検査官として転職し、2年強の会計検査院長時代には、歴代院長の類を見ない多くの国会答弁を強いられたことに耐えたことのご褒美として勲章をいただいたのかなと思っている。

叙勲に際し多くの方々からいただいた祝意に対して重ねて御礼を申し上げるとともに、叙勲受章者の名に恥じないようこれからの人生を過ごす覚悟でいますので、どうぞよろしくお願いいたします。

公認会計士・監査審査会会長就任のご挨拶

千代田　邦夫
（昭和43年商学研究科修了）

公認会計士稲門会の皆様には初めてご挨拶させていただきます。千代田邦夫と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。昨年4月に、公認会計士・監査審査会会長に就任し、早くも1年が過ぎました。

私は、昭和37年に埼玉県立熊谷高校を卒業しました。熊谷駅から高校へは下駄履きで通いましたが、途中「公認会計士」の看板のある黒い塀の地味な家の前を通りました。その後、熊谷のある公認会計士が埼玉県の多額納税者にリストアップされました。何をして儲けたのだろうかと不思議に思いました。

第一商学部入学後は、多少、公認会計士を意識して会計系統の科目を履修しました。1年時は新井清光先生の簿記、2年時は佐藤孝一先生の会計学と染谷恭次郎先生の経営分析、3年時は青木茂男先生の管理会計と日下部与市先生の監査論、ゼミナールは新井清光先生です。これらの先生方が日本に会計学会をリードされておられました。4年生のときは学費値上げ闘争でキャンパスは150日間封鎖され、全体の卒業式はありませんでした。

4年生の夏休み頃から公認会計士の受験勉強を始めました。大学院に一応籍を置いておこうと思い青木茂男先生にお願いしました。学部と大学院のゼミナールの先輩が大塚宗春先生です（周知のように、その後会計検査院長）。2度目の試験で合格したのですが、ちょうど明治から数えて100年、マスコミは薩摩と長州を大々的にキャンペーンしていました。薩摩に行こうと決めました。青木先生の紹介状を持って鹿児島経済大学（現鹿児島国際大学）に赴任し、8年間、まさに青春を謳歌しました。28歳の時、地元のある会社の証券取引法監査の責任者となりましたが、会社は法律上やむを得ず監査を受けているという姿勢でした。わが国の公認会計士監査制度の範となったアメリカの法定監査（1933・34年）以前の歴史を調べてみようと考えました。

その後、立命館大学で33年間、熊本学園大学で3年間、早稲田大学で2年間教壇に立ちました。その間、岡野雄次先輩や松田修一前早稲田教授の紹介により監査実務にも従事することができました。拙著『アメリカ監査論』で日経経済・図書文化賞を頂いた時の紹介文を新井清光先生が書いて下さり（当時新井先生は日本会計研究学会会長）、また、青木茂男先生の名を冠した日本内部監査協会会青木賞も受賞することができました。

立命館定年退職後70歳まで熊本で過ごそうと思っていましたが、一念発起、68歳で早稲田大学大学院会計研究科に応募いたしました。普通では考えられない人事（退職寸前の高齢者の採用）で赴任できたことに、早稲田大学の懐の深さを感じました。 46年間マイクなしの生の声で頑張り、本年1月、会計研究科は私のために最終講義を準備して下さいました。近野博会長、関正弘、岡野雄次（大阪市）、尾内正道、奥山章雄、佐藤正典、松田修一、福田安孝（大分市）、大滝文博、飯泉清、山手章、渋谷道夫氏等の稲門会公認会計士の皆様にもご出席いただき、感激でした。

わが国の健全な金融・証券システムを維持するために、財務諸表が「安全」であることそれに「安心」して依拠できることを保証する公認会計士監査は不可欠です。公認会計士監査のいっそうの信頼性を確保するための公認会計士・監査審査会の職務を遂行するに当たって、早稲田大学と公認会計士の諸先輩、それにこれまでのささやかな研究が自信を与えてくれていることは確かです。

なお、28歳の時の問題意識を解明するため42年後、『闘う 公認会計士—アメリカにおける150年の軌跡』（中央経済社、2014年3月）を出版することができました。稲門会公認会計士の先生方にご一読いただければ幸いです。

今後ともどうぞよろしくご指導のほどお願い申し上げます。

会計検査院検査官に就任

小林　麻理

1980年法学部卒業、1982年法学研究科博士前期課程修了、1989年商学研究科課程修了、1992年商学研究科博士課程単位取得満期退学、2001年博士（商学）早稲田大学

就任顛末

早稲田大学政治学研究科教授から会計検査院検査官に転じることになった、私にとっての「青天の霹靂」の始まりは、昨年4月24日に研究室で受けた官邸からの電話だった。「公職に就いていただきたい」という突然の依頼に、新年度が動き出したばかりで、研究と教育、そして霞が関での審議会へと慌ただしく動き回っていた私は、なんと返事をしてよいのか当惑するばかりだった。3月末の検査官、人事官の国会不同意という厳しい文脈の中で、ゴールデンウィーク直前ということもあり、どう対処したらよいのか、政治学研究科公共経営専攻教務主任、政治学研究科長、政治経済学術院長に急きょ相談するという行動からまず取り掛かった。教授としての私が欠けるという不利益に対して、大隈重信が建議し、小野梓がその礎を築いた会計検査院に、大塚宗春教授に次いで、私が検査官候補者となるという早稲田大学にとっての名誉は圧倒的で、すぐに私の歩むべき道筋が変えられることになった。5月24日に参議院5会派質疑応答各10分、総計50分、28日に衆議院7会派質疑応答各6分、総計42分にわたる国会聴取が行われ、6月4日に衆議院、5日に参議院で国会同意が成立し、「女性初の検査官」と報道された。

検査官は他の官を兼ねることができないため、就任に当たってはありとあらゆる役職を辞さなければならず、早稲田大学教授はもちろんのこと、審議会の委員、学会の理事・委員長、すべての退任に加えて、当時受けていた科学研究費補助金の執行を7月までに終えるという手続きを完了しなければならなかった。前期の成績をつける責務を終え、7月31日に早稲田大学を辞して、8月1日に皇居で天皇陛下の認証と「重任ご苦労です」というお言葉を賜り、検査官の任に就いた。

その一連の過程は、全く想像の域を超えていたというほかなく、精神的にも肉体的にも疲労の極みにあった。そのためか、認証式の丁度1週間前の7月25日未明に自宅で足首の骨を2本骨折するというアクシデントに見舞われ、天皇陛下の御前に車いすで参内し、「お大事に」というお言葉を賜るという貴重な経験まで得ることになった。

検査官の任務に就いて

8月5日に退院し、翌6日から左足に装具をつけ、両松葉づえをついて会計検査院に登庁した。その日の午後に幹部職員に就任あいさつを行い、新たな私の検査官生活が始まった。8月中は事務総局各局各検査課のレクを受け、いよいよ9月から、11月初めの検査報告の総理手交に向けて、毎日山のように積まれる検査報告案・資料と格闘し、連日午前午後にわたる検査官会議に参画するというこれまでにない日々を送った。研究者としては、自分の問題意識に基づいて、分析・考察し、理論や概念整理を行って、あるべき方向性を論理的に導くことに集中するという、ある意味自由な研究姿勢の貫徹で終息することができたのに対して、検査官としては、国費が投入されるありとあらゆる案件に、しかもいきなり検査報告完成の最終段階で取り組むという大変過重な任務を与えられ、文字通り無我夢中で毎日を過ごした。しかしこれは、研究者としてとても貴重かつ稀有な経験で、国家財政、公共経営に対する私の問題意識がさらに深まっているのを実感し、改めて感謝している。私が検査官に就任できたこのタイミングも重要で、制度的に会計検査院の機能が拡充され、その社会的役割の重要性が一層認識されてきた時であることも大きい。すなわち、平成以降、会計検査院法が相次いで改正され、特に、1997年には国会からの検査要請、2005年には、選択的検査対象の拡大とともに、国会に対する随時報告が創設されたことなどに示される会計検査院の役割と存在意義の高まりである。社会状況が複雑化し、国民が求めるサービスニーズの多様化のみならず、東日本大震災からの復旧・復興という大きな課題を抱えるわが国において、基本的に現在および将来の国民の負担によって成り立っている国家財政の運営の在り方自体が厳しく問われているのであり、国民に対するアカウンタビリティが強く求められているということである。しばらくは早稲田大学を離れることになるが、早稲田の在野精神をもって、誠心誠意を尽くして任期を全うしたい。

「早稲田で一番学生を大切にする大学院」を目指して

会計研究科長
佐々木　宏夫

2010年9月から会計研究科長を務めております。実は私は経済学者でありまして、会計の専門家ではありません。ただ、研究科の開設準備委員長の加古宜士先生（初代研究科長）の下で、開設準備委員会の副委員長を務め、カリキュラム策定や人事等に携わりました。そして開設後もずっと会計研究科の教育に関っております。

会計学者でない教員が研究科長を務める会計大学院は全国的にも稀だろうと思いますが、私のような者を研究科長に嘱任するあたりも早稲田の懐の深さが表れていると思っております。

さて、私は2年間の大蔵省への出向期間を除いて、ずっと実務とは縁遠い学術の世界で生きてまいりました。そういう人間が会計研究科で実務家の養成に熱心に取り組んでいる姿を見て、昔の私を知っている人の中にはいぶかしく思う人も少なくないようです。

実は大学教員になって以来ずっと抱き続けてきた疑問があります。それは我々が教える学生のほとんど全員が卒業したら社会に旅立っていくのに、多くの大学教員は実務に直結する教育から目を背けていることです。

こういう実務軽視の姿勢は、少数のエリート育成が主眼であった戦前の旧制大学ではあり得ることだとしても、多くの人に大学教育の機会が広がった戦後の大学では不適切な気がします。

あえて厳しい言い方をすれば、教員が実務への応用可能性の高い教育を行う手間を逃れるため、戦前の大学の建前にしがみついていると言えなくもありません。こういう実務軽視の考え方は、学生が本当に必要とするものを与えていないという点で、大学の重要な構成員である学生を軽視した姿勢だと言うこともできるでしょう。

そういう疑問が自分の中でどんどん強まりつつあった時期に、加古先生や会計学の先生方にお声がけ頂いて、私の長年の疑問を解消してくれる理想的な大学院を作る仕事に参加させて頂いた次第です。

会計研究科の設立以来現在に至るまで、私たちは何よりも学生を大切にする教育を心掛けてまいりました。実は私が前研究科長の小林啓孝教授から研究科長の仕事を引き継いだとき、先生から「私は会計研究科が『早稲田で一番学生を大切にする大学院』になるよう努力してきました。佐々木さんもぜひそのように努力してください」と言われました。

「早稲田で一番学生を大切にする」ということが、加古、小林、佐々木と続く研究科長のモットーであり、今後の研究科長もまたこのモットーに忠実であって欲しいと願っております。

言うまでもなく学生を大切にすることは、「学生の言いなりになる」ことや「学生に媚びへつらう」ことなどを意味しておりません。教育の場では学生に善悪の区別を身につけさせることが大切です。また、人間として、職業人としての倫理観等も徹底的に教え込まなければなりません。

しかし、その一方で「学生が社会に出て本当に必要としているものは何か？」を常に考えながらカリキュラムを進化させていくことや、「学生と共により良い研究科を作り上げていく」という姿勢を常に保つことなどは、「学生を大切にする」姿勢の根幹として、常に実践すべき事柄だと私どもは考えております。

特に「学生と共により良い研究科を作り上げていく」ということは、会計研究科では日常的に実践されております。例えば、入試の説明会などには現役の学生や卒業生が必ず手伝いに来てくれまして、「学生目線」での研究科紹介や受験相談などに協力してくれます。就職活動が終われば2年生が自主的に就職体験記を編纂して、1年生に配っております。

こういう活動を通じて、当研究科では、学生同士、学生と卒業生、学生・卒業生と教職員の間の強固なネットワークが形成されております。

公認会計士稲門会の皆様におかれましても、私どもの卒業生を「早稲田の後輩」としてご指導を賜りますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。

日本公認会計士協会常務理事に就任して

中尾　健
商学部平成元年度卒業

公初めて寄稿させていただきます。正直あまり公認会計士稲門会に参加していなかった私にこのような機会をいただき、大変光栄に思います。

商学部を正式に卒業したのは平成2年3月ですが、その前年の9月に公認会計士の第二次試験に合格させていただき、そのままＫＰＭＧ港監査法人というところで働き始めましたので、「合格→就職→卒業」と感慨にふける余裕もなくバタバタと大学を卒業したことを昨日のように思い出します。

私は故染谷恭次郎先生のゼミに在籍させていただきました。このことがきっかけとなり公認会計士の道を選びました。在学中は一般学生と同様にそれほど先生と接する機会はございませんでしたが、独立してから先生の晩年までお仕事を通じて公私ともに非常に良くしていただき大変感謝しております。私の自宅にも遊びに来ていただきました。先生のゼミは大変厳しく、毎週レポート提出が課され、そのテーマについて二手に分かれて議論をさせるものでした。先生は決して結論やどちらが正しいということはおっしゃりませんでした。この時のゼミでの経験がいまでもとても役立っています。

平成8年4月に6年半勤めた監査法人を退職し、ちょうど年齢が30歳であったこともあり、一大決心というよりもむしろ軽い気持ちで独立しました。翌年が山一・拓銀ショックで今思うと大変な時代でしたが、折しも橋本内閣が「会計ビックバン」と言い始めた時期で、われわれ会計業界はそれからリーマンショックまですごく伸びたと思います。振り返ってみると独立したタイミングは悪くなかったと思っています。

以来、会計税務関係で、様々なお仕事をさせていただきましたが、現在では継続顧問先も数百社、社員もグループ会社を入れると80名を超える規模まで成長させていただきました。いろいろと大変なこともありましたが、お客様と社員に恵まれてここまで来たと日々感謝しております。特に昨年は、従来取り組んでおりました連結納税ＡＳＰシステムを、業界再安価の一律20万円／年まで引き下げることに成功し大変大きな反響をいただきました。

会計士協会のお仕事は、今から7年前にある方から協会の役員に立候補しないかと言われ、その時は多忙であったため一度お断りしたのですが、その3年後にもう一度お声掛けいただき、平成22年7月に理事、昨年より常務理事（租税・社会貢献担当）に就任させていただいております。協会へは租税調査会という形で15年以上参加させていただいております。

私の担当は租税と社会貢献ですが、租税の方は租税調査会と税務業務部会を担当しております。税理士法改正問題にも関与しております。税理士法改正問題の顛末はすでにご案内の通りでございますが、これについて一言だけ感想を申し述べたいと思います。今や、公認会計士も税理士も、はたまた弁護士も人数が相当程度多くなり、昔ほど「先生」と崇め奉られる（？）時代ではないということです。まして、会計サービス業が情報ネットワークの時代に突入しており、個人で資格を持っているからといって、転職時の最低限の自己証明の手段にはなるかもしれませんが、それ自体が自動的に収益を生むという状況ではありません。したがって、残念ながらこの種の業際問題は全く持って意味をなさないと思いました。

しかし、一方で従来ＪＩＣＰＡは、税務業務を行っている或いは行おうとしている会員に対しては十分なサービスをしていなかったのは反省すべき事実であり、この点最大限の拡充を図っているところです。私の任期はあと2年と数か月しかございませんが、その限りで最大限の努力をするつもりでおりますので、公認会計士稲門会の皆々様も何卒ご理解ご協力をお願い申し上げます。

雨のち晴レルヤ

黒崎　知岳
1997年政治経済学部卒

私は、現在、赤坂有限責任監査法人のパートナーとして働いていますが、紆余曲折があり今に至っています。今までに色々な転機がありましたが、その度に人のつながりで助けられてきました。そのような人とのご縁についてお話させて頂ければと思います。

私は、1997年に政治経済学部を卒業後、某短資会社に就職しました。短資会社というのは馴染みのない業界ですが、銀行間の資金貸借の仲介業務や日銀の金融調節のお手伝いをする会社です。それまでは安定した業績で推移している業界でしたが、私が就職した年に未曾有の金融危機が訪れ、週末毎に金融機関が倒産していくような悲惨な状況でした。金利水準がゼロに近づくに伴い、短資会社の仲介手数料率がどんどん引き下げられ、業績は右肩下がりの状況となりました。そのような環境で、3年ほど短資会社で働いていましたが将来的な希望が描けず、転職を視野に当時ブームになっていた米国公認会計士の資格を働きながら取得することになりました。

2000年に米国公認会計士を取得し、転職先を探していた時に、大手監査法人で働いていた知人の紹介により、当該監査法人にすんなりと転職することができました。金融部に所属して、監査に加えコンサルティング業務なども担当し、また地方への出張も多くとても有意義で楽しい経験を積めました。その監査法人には結局5年ほど勤めましたが、残念ながら粉飾事件の影響により、最終的には解体されてしまいました。

2005年に、これもまた知人の紹介で、当時は飛ぶ鳥も落とす勢いだった不動産ファンドに転職しました。不動産関連会社に投資する部門で運用業務を担当しました。当時の不動産マーケットは急上昇で、大学卒業後に初めて好景気というのを肌で感じることができました。ただ、その渦中にいると自分がバブルの中にいるというのが分からなくなってしまうようです。その会社では、運用しているファンドに従業員も自己資金を投資してリスクを取り、アップサイドはファンド投資家と一緒に享受するという方針でした。しかしながら、リーマンショックであっという間に不動産バブルが大崩壊し、逆にダウンサイドを投資家と一緒に被る結果となりました。それまでこつこつ貯めた財産はほとんど吹き飛ぶこととなりましたが、妻には怖くて正確な損失額を伝えられませんでした。会社の業績も大幅悪化する中、購入したばかりの自宅のローンと専業主婦の妻を抱え途方に暮れていました。

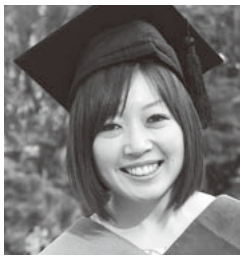
そんな窮地に立たされていた時、ありがたいことに赤坂有限責任監査法人を立ち上げていた監査法人時代の同僚が一緒に働かないかと誘ってくれました。会計業界に戻るなら日本の公認会計士の資格が必須だろうと、一念発起して受験勉強を開始することになりました。勉強開始から論文試験まで7ヶ月くらいの短い期間でしたが、住宅ローンと専業主婦の妻を抱えた背水の陣で臨み、また大量合格時代という追い風もあり、無事に2009年の試験で合格することができました。

2009年9月から現職となりましたが、今度はパートナーとして、自分でクライアントを見つけて来なければなりません。ここでも、主に不動産ファンドで働いていた時にお付き合いのあった方や他の会社に転職した元同僚に助けて頂き、お仕事を色々と紹介して頂きました。不動産ファンドで財産は大きく失いましたが、今ではその時期に築いた人脈は何物にも代えがたいものとなっています。

公認会計士に合格したのを機に会計士稲門会にも参加するようになりましたが、幅広い年齢層の皆さんとお付き合いさせて頂く機会や、お仕事を一緒にさせて頂く機会に恵まれました。会計士稲門会では横だけでなく、縦の繋がりを持てるのがとても有意義だと思いますので、若手のみなさんも是非参加して頂ければと思います。

過去を振り返ると、なぜか私が今まで働いた会社の業績は悪化する傾向にあるのですが、幸いにも現職の赤坂有限責任監査法人は順調に成長しております。これまで築いてきた皆さんとのご縁を今後とも大切にして、会社も自分も成長して行きたいと思います。

公認会計士を志して



稲葉　佳代子
平成25年度会計研究科卒

この度、会報に寄稿させていただくこととなり、大変光栄に思っております。先輩方の目に触れると思うと、何を書こうか悩みましたが、会計専門家としての道の始点に立った今、その初心を記したいと思っております。

私は、早稲田大学商学部を卒業後、三年余り事業会社で働いておりました。学部時代は勉強も就職活動もおざなりに、将来の夢も目標もないまま何となく就職し、「努力」や「挑戦」といった言葉とは無関係の日々を過ごしていたように思います。

前職では、法人向けの新規開拓営業に従事しており、案外性にあっていたのですが、二年ほど経った頃からふと、行き詰まり感を感じるようになりました。

提案営業とは言っても、結局はラインナップにある商品・サービスしか売ることが求められている、私でなくても、いや、うちの会社でなくても変わらないのではないか―

もっと顧客の経営に深くまで関わって、自分の考えを提案して貢献できる仕事がしたい―

考えた末、学部の頃に関わりのあった会計という切り口から、専門家としての道を拓こうと会計士の勉強を始めました。この思いに拍車をかけたのは、それからほどなくして起こった東日本大震災です。惨劇を目の当たりにして、自分も何かの助けになりたいと、心が大きく揺れました。混乱が一段落したところで、被災地の産業が立ち直ることが復興への原動力となるに違いない。被災地の企業の復興を助けるNPO法人等の機関で働きたいと思ったものの、何となく営業をしていただけの私では応募要件で求められるような能力も経験も持っておらず、数年の任期の後、再就職できるのかという不安もあり、行動には移せないままでした。

学部を出て三年間も働いて、結局何も変わっていない自分への苛立ちを感じると同時に、このような時、十分な能力を持って、自分の考えたように行動できる人間でありたいと強く思いました。早く成長したいという気持ちで、そのまま仕事を辞めて会計研究科に入り、勉強に専念しました。

大学院では、久しぶりに訪れた学生生活を無駄にすまいと、初めて真剣に勉強に取り組みました。学界や実務の第一線で活躍されている教授の方々、忙しい中叱咤激励に来てくださる先輩方、様々な志を持つ同期に囲まれ、会計士としてどうキャリアを描いていくかを常に考え続けた二年間でした。諸先輩方も同期も、同じ公認会計士という資格に軸を置きながら、思い描くキャリアは皆それぞれでしたが、強いつながり意識がありました。試験が直前に差し迫り、家と自習室の往復で精神的にも疲れ切っていた時期、先輩が仕事の合間を縫って私の代わりに神社で合格祈願の絵馬を書いてきてくれたことは忘れられません。修士二年の秋、皆の支えのおかげで公認会計士試験に無事合格し、会計専門家としての道を歩むこととなりました。

結局、私は、監査法人ではなく税理士法人で税務からスタートすることに決めました。専門家として企業の経営に貢献していきたいという考えをより体現できるのは税務であると考えたこと、そして、事業再生の仕事に惹かれ、将来、身につけた専門性を土台として携わっていきたいと考えたことが大きな理由です。

公認会計士の資格を取って、初めから税務の道に進む人は多くありませんし、漠然とした不安もあります。しかし、ここ早稲田の杜で多くの仲間を得たことで、どんな環境でも自分を見失わずに頑張っていける気がしています。学部の頃、ゼミの教授に教えていただいた、「一隅を照らす」という思い。社会の一隅を照らす存在になれるよう、日々努力を惜しまずに過ごしていこうと思っております。

生態学者から会計士へ

古知　新
（平成21年会計研究科卒）

私が公認会計士を志したのは29歳のときでした。それまでは他大学の大学院で長らく食糞性コガネムシ（一般に糞虫といいます。有名なフンコロガシもこの仲間です）を使って、生態学の研究をしていました。幼少のころから昆虫にひとかたならぬ興味を抱いており、その研究をするために農学部に入学しました。さらに研究以外の道は考えることもできなかったので、就職活動も全くせず、当然のように大学院に進学しました。

自然界にはさまざまな哺乳類がいて、種ごとに大きさ、形状、成分が異なる糞をします。糞虫は糞をエサ資源として利用しますが、糞虫にも様々な種類がいて、大きさ、生息場所、糞の利用のしかたが種ごとに異なります。糞虫は種ごとに「好みの糞」がありますが、私はそれがどのような要因によって決定されているのか、さらには糞虫の群集がどのように形作られているのかを解明することを目指していました。

私の研究の結果、「好みの糞」を決定している主要因は、その糞虫にとっての栄養価であることが明らかになりました。栄養価の高い糞を利用すると幼虫の生存率が高くなり、また子の体サイズも大きくなるため、より多くの子孫を残すことができるのです。一方、栄養価が高くても、その糞を利用できない場合もあります。糞虫は乾燥した糞はエサとして利用できません。そのため、糞の消費速度が遅い糞虫にとっては栄養価が高くても乾燥しやすい小型の糞は「好みの糞」にはならないのです。

他にも結果が出始め、どのように個々の結果をまとめ、学位論文に仕上げていくかという段階に差しかったものの、30歳を目前にして将来のことも気に懸かってきました。近年は博士号取得者が急増し、学位を取ってもプロの研究者になることは非常に難しい状況にあります。生態学の分野では助教のポストの公募が1つ出ると、100人近くの博士が応募するとか。プロの研究者になることが難しいことはもっと前からわかっていたことなのですが、急に危機感が募り、研究を離れて就職をする決心をしました。

ところが就職をしようにも、新卒として就職できる年齢ではないし、何か資格を取って仕事をするしかないと考えました。数ある資格の中からなぜ会計士を選んだのかは実は判然としませんが、とりあえず日商簿記の勉強からはじめ、早稲田大学の会計研究科に入ってから本格的に会計士試験の勉強を開始しました。

会計研究科の「考えさせる」講義スタイルは私にとても合っていました。考えすぎて講義後に頭が痛くなることがよくありました。

ちょうど合格者が急増した時期にも重なり、短期間で会計士試験に合格し、監査法人に就職することができました。現在は監査法人を退職し、稲門会の縁でお誘いいただいた会計事務所に勤務しています。

まったく異なる分野への方向転換をしたため、会計士業界での人とのつながりは稲門会だけが頼りです。今後も諸先輩方にご指導いただければ幸いに存じます。また、若手幹事会を通じて同世代の方々とのつながりも深めていけたらと考えています。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

「転換点」

会計研究科
大久保　卓磨

修了式後の懇親会２次会にて、会計研バスケ部のメンバーと（右から一人目）

この度、会報に寄稿させて頂く機会を得、大変光栄に思います。テーマは自由ということなので、何を書こうか迷いましたが、ここは真面目に(笑)、会計士を目指したきっかけや、大学院での２年間、そして今後の抱負について執筆させて頂きたく思います。

【公認会計士を目指したきっかけ】

私が「公認会計士」というものの存在を知ったのは、高校２年の夏でした。きっかけは、部活（バスケ部）のOB会で、一回り半ほど歳上の先輩と進路の話をしていた時でした。その方は、会計士ではなくNBAの解説などをしている方でしたが、「数字や計算が好き、独立してみたい」などの当時の私の希望から、公認会計士とかいいのではないかというアドバイスをしてくれました。この時初めて会計士の存在を知り、自らその職務内容などについて調べるきっかけを得ました。公認会計士は、職務領域の広さ、社会的評価の高さ、独立可能性などの点で高校生の私にはとても魅力的でした。このとき、いつか自分も会計士になりたいという思いを抱いたのを覚えています。このようなきっかけがなければ、もしかして私は会計士を目指さずに違う道を選択していたのかもしれません。

【大学院での２年間】

学部を卒業後、私は会計研究科に進学しました。進学理由は３つあり、①勉強はもとより色々な経験をして知見を広めたい、②会計士試験に合格する能力を身につけたい、③新しい環境で出会いの幅を広げたい、というものです。

ここでの２年間は、勉学という意味においても、人事交流という意味においても、非常に充実したものでした。

勉学の面では、基礎理論から、応用的な理論、そして実務的な教育など数多くの科目が開講されており（正直、２年間では履修してもしきれないくらいです）、そのような中から、自分の目標・目的・興味に合致した科目を選び、学ぶことができました。そのため、非常に楽しく、飽きることもなく、興味深く学ぶことができました。

人事交流の面では、先生方や先輩方、そして同期とよく交流することができました。会計研究科は、授業を通じて、部活やサークルを通じて、また、先輩方が有志で開催してくださる監査体験やPCスキルのプログラムなどを通じて、縦の関係を構築する機会に恵まれていました。同期とは、事あるごとに食べにいったり、飲みにいったりと、公私にわたって密な付き合いができたと思っています。同期の仲間とは、各々目指す方向は違えども、「会計」を軸に、多くの時間を共有しました。彼ら彼女らと共に過ごし、切磋琢磨した時間というのは、私にとって何物にも代え難く、２年間の大学院生活で一番の思い出です。

また、誠に光栄なことに、会計研究科の学位授与式においては、修了生を代表し謝辞を述べさせて頂きました。この時に述べた感謝と決意を忘れずに、今後も努力して参りたいと思います。

このように様々な経験ができたことから、今後過去を振り返った時に、大学院での２年間というのは、これまでの人生における転換点であったと断言できることでしょう。

【今後の抱負】

独立してみたいという想いから目指し始めた公認会計士でしたが、現在は、会計研究科で学んだことやこれまでに出会った人々の影響から、組織でしかできないこと、組織にいるからこそできることへの魅力を感じています。

今後自分が会計士として生きていくには、まず、会計・監査のベースをしっかり築き上げる事が重要であると思いますし、学部・大学院を通じてそのように教わってきましたので、自分のコアとなる部分の形成に注力したいと思っています。

また、将来的には、会計士として海外で仕事をするという夢も叶えていきたいと思っています。

まだまだ漠然とした夢や目標が多い状況ではありますが、知識・経験の幅が広がればそれに応じてクリアになってくると思いますので、自分自身それを楽しみにしながら、我が会計士人生のスタートを切りたいと思います。

会費納入のお願い

今年も会費納入の季節となりました。同封致しました振込証でお振り込み頂ければ幸いです。なお、御自分の会費納入状況をお知りになりたい方は、会計担当副会長もしくは常任幹事に御連絡下さい。

公認会計士6,000円　　会計士補3,000円

（振込先　　郵便振替口座　東京7-163893　口座名　公認会計士稲門会）

歩み続ける

大場　睦子
（平成26年商学部卒業）

1. 少し変わった道のり

私の監査法人入所までの道のりは少し変わっているのではないかと思います。

「今年の春に早稲田大学を卒業し、監査法人に入所します。」

これだけを聞くと、在学中に合格して新卒で入所するのだろうと思われる方が多いのではないでしょうか。しかし私は、ひとまず在学中に公認会計士試験に合格はしたものの新卒での入所ではありません。これが自分の道のりが変わっていると考える理由の一つです。つまり、私には既に社会人経験がありました。働きながら受験勉強をして早稲田大学に合格し、仕事を辞めて再び学生となりました。

そしてもう一つ変わっていると考える理由は、前職がエステティシャンであったということです。美容業という全くの異業種から公認会計士を目指しました。

何故このような道のりを歩むことにしたのか、その動機については今回のスペースでは少し足りなさそうなので、またの機会に是非お話をさせてください。

2. 一貫した想い

突然ですが、私は最高の人生だったと笑いながら死にたいと思っています。何かの選択で悩んだ時は、極力自分が楽しそうだと思うほうを選ぶよう心掛けています。途中がどんなに難しそうな事や辛そうな事であっても挑戦する気持ちを大事にしたいと思っています。

こんな事を書くとなんだか強い人間に思われるかもしれませんが、全くそんなことはありません。実際には不安でどうしようもなくなることが多々あります。もっと強くなりたいと思ってはいるのですが、なかなか難しいものですね。

仕事と両立して大学受験勉強をしたときも、公認会計士試験勉強をしたときも、不安で眠れないことなど日常的にありました。自分のやろうとしている事は本当に間違っていないのだろうかと疑心暗鬼になってしまったことも何度かありました。それでもまた前を見て、頑張ろう、やってやろうと思えたのには理由があります。私は人に恵まれていたからです。愛すべき友人や尊敬する先輩方、そして最愛の家族がいつもそばにいてくれた事がいつも私の心の支えとなりました。

3. 周囲の助け

私は自信を持って披露出来るような特技を持っていません。ですが、人にとても恵まれている事には自信があります。これは本当に幸せな事であると思っています。

今までの道のりには様々な出来事がありましたが、いつも必ず誰かが自分を助けてくれました。

エステティシャンの仕事を続ける事が出来ないと判明して落ち込む私を励まし続けてくれた両親。

挑戦する事の大切さを繰り返し何度でも説いてくれた熱い上司。強い憧れと目標を持たせてくれた人生の先輩方。私の作った壁をぶち壊してくれた早稲田大学の友人達。そして、いつでも1番の理解者・良きライバルで居続けてくれる私の双子の相棒。心から感謝をしています。きっと自分1人の力ではここまで来ることは出来なかったのではないかと思います。

お陰様で今年無事に公認会計士試験に合格する事が出来ました。そして、入りたかった監査法人に就職する事が出来ました。三年前会社を辞める時に掲げた目標のうちの二つをやっと達成する事が出来ました。

ですが、スタートはこれからです。やっと世界が動き出しました。

これからも自分が掲げた目標を達成するために全力で努力をしていきたいと考えています。

そして私を助けてきて下さった皆さんに恩返しが出来る位大きく成長する事をここに誓います。

まだまだ未熟者ではありますが、今後ともどうかよろしくお願いいたします。

改めまして、素敵な人生をありがとうございます。

『みらい設計ガイドブック』において インタビュー記事掲載されました!!

岸　佳祐
（2008年政治経済学部経済学科卒）

早稲田大学キャリアセンターより依頼され、2014年版『みらい設計ガイドブック』に公認会計士として私のインタビュー記事が掲載されました。この『みらい設計ガイドブック』は、20代、30代の比較的若いOB、OGが社会でどのように活躍しているか、学生時代はどのような生活を送っていたかを職業ごとにインタビュー形式で紹介している冊子です。4月の新入生オリエンテーション等での配布を中心として、約17,000部を在学生に配布し、充実した学生生活を送るための手助けをすることを趣旨とした冊子です。

私も学生時代を思い出しながら、インタビューを受けました。私の場合、小学生のときに公認会計士という名前を知り、公認会計士についてはよくわかっていませんでしたが、ただ漠然と公認会計士になりたいと思い続けて、実際になりました。私のようなパターンはかなりマイノリティーであり、多くの方は大学生のときに公認会計士という職業を知り、そのときから勉強を始める方が多いと思います。また、最近は再び売り手市場に転じていますが、数年前は就職難といわれていたこともあり受験者数が減っているといわれています。そのため、少しでも多くの早稲田の学生に、公認会計士という職業を知ってもらい、目指してほしいと思いながら、インタビューを受けました。この冊子を読んだ新入生が今年の公認会計士試験を受験するわけではないため、すぐに受験者数増加につながるわけではありませんが、比較的近い将来に公認会計士になってもらえると信じています。

また。2014年2月から短期間ですが、ニューヨークオフィスで働いています。アメリカでは、BIG4は当然のように知っていて就職人気企業ランキングにも上位に入っており、驚きました。BIG4が野球やバスケットボールのゲーム等でもスポンサーになるほか、オリンピックのスポンサーにもなっています。法制度や難易度等の違いはあるものの、アメリカと日本では、CPAやアカウンティングファームの認知度が大きく異なっており、今後は日本でも認知度を上げていく必要があります。

アメリカで働いてみて、私自身もっと大学時代に英語を勉強しておけばよかったと痛感しております。私の学生時代にも学生4人に対してネイティブの講師1人の英会話の授業が必修でありましたが、最近の早稲田では、セメスター制を導入をするほか、留学のあとおし、語学クラスの充実、国際的な内容が学べる授業が増えているようです。人生の大半をアメリカで過ごしている方やアメリカの高校や大学を卒業した方の英語力と同等の力を身につけることは難しいかもしれませんが、早稲田の後輩には充実しているカリキュラムを活かしてほしいと思います。

なお、公認会計士稲門会についても、若手幹事が中心になって行っているキャリア相談会を行っている旨も記載されていますので、もし冊子を見つけられましたら、ぜひお読みいただければ幸いです。

会計研究科での学生生活を振り返って

倉橋　秀典
（平成25年度会計研究科卒）

この度、公認会計士稲門会会報に寄稿させていただく機会を頂戴し、大変光栄に思います。まだまだ未熟な身ではありますが、僭越ながら筆を執らせていただきます。

・会計研究科に入る前

私は、大学二年生の頃から会計士試験の勉強を始めました。そもそも私が会計士を目指した理由は、父が公認会計士という職業についており、幼い頃から会計士の社会の中での重要な役割を目の当たりにし、尊敬の念を抱いていたことにあります。そして始めた受験生活でありましたが、なかなか結果を出すことができず、短答式試験不合格のまま大学四年生を終えることになりました。当時は、予備校のカリキュラムに従って、何年も同じテキスト・答練を回し続けるだけの生活でした。それは、テストの点数が上がったとしても、会計を通し自分自身の人間としての成長を感じられない虚しい時間でありました。

しかし、同時に、自分の学んでいる知識が社会の中でどう役に立てられ、自分が社会の中でどのような役割を果たすべきなのかを考えることができる環境に身を投じたいと考え始めた時期でもありました。

・会計研究科での生活

このような中で、私は早稲田大学大学院会計研究科に進学いたしました。入学してからは、会計士試験科目を当研究科の授業で勉強しつつ、青山慶二教授の下で、税法修士論文に専念しました。ゼミはM1年の秋学期から始まり、自身の「税法における問題意識」を見つけるために、様々な税法論文を読み続ける生活でした。同時に、短答式試験の勉強も併行して行い、2013年㈱試験で合格することができました。そして、M2年の春に自身の論文テーマとして「無利息融資課税 - 貸手における所得計上の法理 - 」について執筆することが決まりました。春にテーマが決まってからは、夏まで2013年論文式試験の勉強に専念しました。

夏以降においては、無利息融資課税における論文を日本法、ドイツ法、アメリカ法別に読み耽りました。この点、早稲田大学のデータベースのLexis Nexisを通して、1970年代から2010年までのTax Law Reviewを読んだ経験は、自身の成長を非常に感じた有意義な時期でありました。また、自分の有する問題意識を、青山慶二教授と議論することは人生で代えがたい貴重な経験であったと確信しております。

このような中で、会計士試験を合格することができ、修士論文の完成にも至りました。何かしら自分の成長を実感できる機会を望んでおりました私としましては、会計研究科における学生生活は非常に充実したものでした。

・就職してからの夢

私は、監査法人の就職活動はせず、政府系金融機関に就職することを決めました。これは、会計研究科における経験や修士論文作成の経験を通して、自分自身の日本経済に対する問題意識を持ち、その問題意識に対してのアプローチとして、監査法人に入ることが必ずしもベストではないと感じたからです。

私の将来における目標は、公認会計士として自身の知識の研鑽に努め、当銀行において、「金融力で日本の舵を取り、日本の国益を追っていく」という志の下、日本社会が抱える様々な問題を解決し、日本経済の発展に貢献できる人材に成長していきたいと考えております。

・結びに

長くなりましたが、二年前には思いもつかなかったキャリアにつくことに至ったのは、会計研究科における経験によるものが大きいと思います。いまだ社会人として未熟ですが、謙虚かつ貪欲に学ぶ姿勢をもって日々精進してまいりたいと思います。

最後に、会計研究科に入るために援助をしてくれた両親、試験生活を最後まで支えてくれた友人、多大なるご指導とご助言を賜りました指導教授である青山慶二教授に対して深く感謝の意を述べ、寄稿の結びとさせていただきます。

学生時代のふたつの夢、公認会計士とお天気キャスター

樋口　奈津子
（平成21年　政治経済学部卒）

この度は公認会計士稲門会会報に寄稿する機会をいただき、誠にありがとうございます。学生時代の思い出、民間気象情報会社でのエピソードをお話させていただきたいと思います。

ちょうどリーマンショックの1年前、大学3年の夏休みが終わりに近づき、時折秋の風を感じる頃でした。のんびりごろごろと休みを過ごしておりましたが、ふと周りを見渡せば早稲田の友人たちは留学や外資系金融機関でのインターンシップを経験するなど、新たな環境に飛び込み視野を広げ、自分は社会にどのように貢献していくべきかを考えていたのでした。周囲と自分の意識の差に愕然とし、将来や社会との関わり方について検討した結果（途中経過省略）、私は公認会計士として大学卒業後社会に貢献しようと決意するに至ります。しかしそれと同時に、もともと早稲田大学政治経済学部を目指したのは経済学とともに長谷川真理子先生の「自然誌・生命科学」の講義を受講したいとの思いからであり、会計・財務のほかに、自然や環境などに直接的に関わる仕事がしたいという気持ちもふつふつとわいてきたのでした。

ふたつの夢のうち先にその入り口に立てたのは、自然・環境に関わる仕事でした。気象学に触れられるのではないかとの期待を胸に提出したお天気キャスターの応募書類が幸運にも選考を通過し、その後オーディション、一般投票を経て大学3年の冬、民間気象情報会社のお天気キャスターとして働けることになったのでした。

職場は気象情報会社ということもあり、キャスターという枠にとらわれず、常に気象に関する知識を学ぶことのできる非常に有り難い環境でした。また現場ではそうした気象の知識に加え、情報を的確にそして親しみをもって「伝える」という技術や工夫を学ぶことができました。TV向けの天気予報では、「おはようございます」のたった一言を伝えることですらこんなに難しいものなのかと驚いたことを覚えています。また天気の状況に合わせた衣装選択、声の高低・スピード・間、表情や身振りなど、原稿を正確に読むと同時に多くのことに気を配らなければならず、はじめはとにかく常に頭の中が満杯の状態でした。

当時は会社の寮に入っていたのですが、初めての一人暮らしということもあり、朝食におもちを食べ過ぎ太って怒られたことや、寝坊をして少ししか朝食を食べられずに出社し、収録時に声が出ていないと注意を受けたこともありました。自己管理の大切さを今以上に感じる日々だったと思います。

大学の試験前には、仕事を終えると同時に講義のレジュメやテキスト、参考文献を開き、同じように学生だった会社同期と声を掛け合いながら夜中まで勉強していたのも今ではよい思い出です。

仕事を通じて出会えた同期の仲間（13人、内2人は早稲田大学卒業生）は、現在アナウンサーとして活躍していたり、起業して会社を経営していたりと様々で、いまでも会うたびに多くの刺激を受けています。

また思えば人前に立つことも目立つことも大嫌いで授業中に挙手することさえできなかった私が、新たな環境に一歩踏み出しこうした仕事を経験できたのは、常に新しいことにチャレンジし続ける高い志をもった早稲田の仲間の姿があったからに他なりません。

さらに今後は稲門会の諸先輩方、会計士試験同期合格者との出会いを大切に、会計士としての経験を積み社会に貢献していきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。し上げます。

踊る会計士

早稲田大学大学院商学研究科2年
二神　舞美

私はクラシックバレエを4歳から続けており、幼いころはいつかバレリーナとして世界の舞台で活躍することを夢見て、稽古に励んでいました。

大学では社会の仕組みを幅広く学びたいと思い、早稲田大学商学部に入学しました。その頃には、自分にとってバレリーナを職業にすることは非常に難しいということが既にわかっており、将来の自分の姿はぼんやりしていました。それでも大学一年生の間は、大学の勉強やアルバイト、サークル活動の傍ら、週に4回、夏休みはほぼ毎日バレエの稽古に通い、チャンスがあるごとに舞台にも立ち続けました。

大学生活を満喫した一年が終わるころ、将来のことを真剣に考え始め、もともと商学部で出会った会計に興味を持っていたので、女性として、結婚・出産後も専門性を持って長く働きたいと考えて、大学2年生から公認会計士を志して勉強を始めました。

「絶対に合格する」という思いを持って勉強を始めたものの、何事も時間をかけて理解していくタイプの自分にとっては、公認会計士試験は想像を遥かに超える難しさでした。なかなか成績が伸びず、合格する気配もなく、精神的に苦しい時期もありました。それでも、バレエを通して養った継続力を武器にして、周りの温かい人々にも支えられながら、何度落ちても諦めずに挑戦し続けました。その結果、大学4年の12月の短答式試験に合格し、続く論文式試験も無事に突破することができました。

実務を経験する前に理論的な研究をしたいという思いから、昨年、早稲田大学大学院商学研究科に進学し、学部から引き続き管理会計のゼミに所属しております。現在は、専門分野の研究と並行させて、将来グローバルに活躍する会計士になれるよう、英語の勉強にも力を入れております。

今年で最後の学生生活は、一日一日を大切にして努力を怠らず、何事にも思い切ってチャレンジしていきたいです。そして、来年社会に出る時には、何倍も成長した自分になっていたいと思います。

また、受験中も細々と続けていたバレエは私には欠かせないものなので、これからも時間を見つけて踊り、「踊る会計士」を目指したいです。

編集後記

本号から、会報担当が、小職となりました。若手幹事会の、小口敬、古知新、衞藤祐介各氏が編集委員を担当しています。長年、古谷伸太郎会員が会報を担当してくださいました。長年、ご苦労様でした。投稿をご希望の会員の方は、公認会計士稲門会ホームページの『お問い合わせ』でメールお願いいたします。（会報担当副会長　松下八寿彦）

（印刷所　三共綜合印刷株式会社）